

大野市は福井県東部に位置し、その面積は県内最大であり、東京23区をも上回る。中心市街地は市の西部に存し、中心市街地以東の岐阜県との県境までは大半が山林であり、その面積割合は市域の約87%を占める。

現在の中心市街地は、今から約440年前、織田信長の家臣、金森長近が大野に入り、大野盆地が見渡せる亀山に築城し、その東麓に基盤の目の城下町を造り始めたのが起りである。今日においても、当時の大野城石垣や基盤の目の街並みが残っており、越前の小京都として知られている。

30年で児童数半減

大野市小学校児童数の推移は下記グラフのとおりである。



①複式学級により全校3学級の乾側小学校 ②デイサービス施設になった旧森目小学校



～文化的歴史的所産を巡る～ 残したい情景

第7回 福井県大野市



一般財団法人 日本不動産研究所

る。89（平成元）年頃より減少が始まり、16（平成28）年

の児童数は1554人で89（平成元）年の約47%の水準となっている。また、国勢調査による人口総数は15（平成27）年3万3109人で90（平成2）年4万9991人の約81%であり、農林業センサスによる農家数は、15（平成27）年1294戸で平成2年3301戸の約39%である。これらのデータからは、市全体の人口動態と比較して、農村集落の人口流出が顕著で、児童数はさらに深刻な状況にあることが窺える。

当該状況に対応して、大野市では農村部小学校の統廃合

深刻な小学校の統廃合

子供のいる農村の復活を

が順次行われてきており、一部の小学校は廃校後に売却され、用途転換して利用されている。

10校を2校に統合

現在、大野市には小学校10校があり、そのうち4校に複式学級（2つ以上の学年をひとつにした学級）が存する。

小学校数に対する複式学級割合は40%で県内各市の中で、複式学級割合が最も高い状況にある。

大野市では上記状況を背景

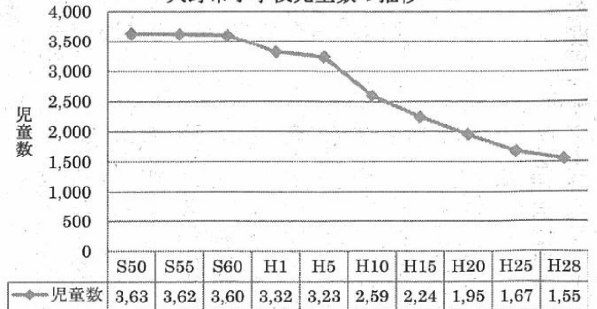
子育て世代が流出

現在の住宅地市況は、小学校に近い区画整然とした住宅地域に、一次取得者である子育て世代の需要が集中する傾向がある。このため、小学校が農村から消えることで、子育て世代の流出が加速し、農村がさらなる人口減少、高齢化へと向うことは容易に予測

一方で、小学校は勉強を学ぶ場所というだけでなく、年齢の異なる多くの友人とコミュニケーションをとり、社会生活を覚える場所でもあるため、一定以上の人数がいる方が望ましい。また、人口減少により自治体の財政も厳しくなってきたため、現状のままの小学校体制を維持してゆくのにも現実的に困難である。

現在では実現できないが、VR、5G通信、AI等の技術発展により、農村に住みながら、不便なく教育環境を享受できる環境が整い、現在の子供のいる農村が、未来にも続くことを切に願うのである。（福井支所／不動産鑑定士・宮岡広英）

大野市小学校児童数の推移



出典：大野市教育委員会「大野市小中学校再編計画」